子どもの野外体験活動の意義と保護者の期待

村田恵美*・田中理絵・霜川正幸

Meaning of a child's field experiential activities, and a guardian's expectation

MURATA Megumi, TANAKA Rie, SHIMOKAWA Masayuki

(Received September 28, 2012)

Ⅰ. 野外体験活動の意義

(1) 体験活動の重要性

携帯電話を使えば、どこにいても誰かと話ができる。パソコンを使えば、お店に行かなくても買い物をすることができる。私たちの生活は便利なものが増えた。便利になった反面、日常生活の中で直接体験の機会が減少している。買い物では、直に品物を見て良い品かどうかを判断したり、商品について店員と話したりすることが少なくなっているだろう。また、どれだけテレビゲームで怪物を倒していても、誰かと叩き合うけんかをしたことがなければ、叩かれたときの痛みもわからないだろう。

さらに、生活する上で便利なものが増えたことで、日常のなかで試行錯誤する機会が減少している。より良い生活をするために自分で知恵を使わなくても、条件に合った道具や情報がたくさんあるので、そのなかから選択すればいいのである。必要な情報を入手する能力も大切だが、そのような他力本願では、自ら考えて行動する力は身に付かないだろう。それが、今、求められている「生きる力」ではないだろうか。

平成20年3月に告示された「小学校学習指導要領」では、「生きる力」の育成というこれまでの教育理念をもとに、教育内容の主な改善事項として「体験活動の充実」が盛り込まれ、「道徳教育を進めるに当たっては、(略) 集団宿泊体験やボランティア活動、自然体験活動などの豊かな体験を通して児童の内面に根ざした道徳性の育成が図られるよう配慮しなければならない」と明記された。また、「特別活動解説」では、「児童の発達の段階や人間関係の希薄化や自然体験の減少といった児童を取り巻く状況の変化を踏まえると、小学校段階においては、自然の中での集団宿泊活動を重点的に推進することが望まれる。(略) 集団宿泊活動については、望ましい人間関係を築く態度の形成などの教育的な意義が一層深まるとともに、高い教育効果が期待されることなどから、学校の実態や児童の発達の段階を考慮しつつ、一定期間（例えば1週間（5日間）程度）にわたって行うことが望まれる」と自然の中での長期集団宿泊活動が推奨された。

このように、現代の子どもには本物や自然物にふれる機会が減ったことにより、直接体験が求められている。そして、多くの物や人との直接体験ができる場として、野外体験活動が推進されている。

---

*山口大学大学院

（2）野外体験活動の歴史

野外体験活動のなかでも教育的効果を期待する活動として、キャンプが取り上げられることが多い。近年行われている教育的な組織キャンプの起源と言われていることの一つが、イギリスのボーイスカウト活動である。「国際主義的」「自由主義的」な側面をもつと言われているボーイスカウトでは、キャンプを中心としたウッドクラフト（森林生活法）や、グループで行うパトロールを行っていた。これが現代の野外教育、グループワークと呼ばれるものである。また、アメリカやヨーロッパでは、ハイキングやヨットなど、自然のなかでのレクリエーション的活動を中心に行っていたが、次第に教育的、組織的な意味合いが強くなっていく。

日本では、1911年に乃木希典が学習院の生徒に実施したスカウト式臨海キャンプが、最初の教育キャンプだと言われている。乃木は陸軍の田中義一にボーイスカウトの資料を渡し、青少年教育の研究をすることを勧めた。そして、1915年、内務省と文部省から「青年団共同訓令」が出せれ、国民の軍事意識の啓発と軍人の不良行為の防止の課題を解決した。このように、日本では青少年の問題対策としてキャンプが取り入れられていた。

その後、1961年にスポーツ振興法が公布され、野外活動の普及が推奨された。また、1984年には文部省が「自然教室推進事業」を実施し、児童生徒の健全育成のために自然体験活動が推進された。1990年代に入ると、子どもの「生きる力」や「ゆとり」が重視され、長期の青少年自然体験活動推進事業が展開された。そして、1999年、生涯学習審議会答申において、「生活体験・自然体験が日本の子どもの心をはぐくむ」が出された。2001年には学校教育法・社会教育法の一部が改正され、「奉仕体験活動」「自然体験活動等体験活動」の充実ということが組み込まれた。

戦後のキャンプ活動では、自然環境で生活することが注目されている。また、1990年以降には環境教育だけでなく、「体験」ということが重視されるようになっており、野外体験活動の教育的意義が認められていった。青少年の野外教育の振興に関する調査研究協力者会議（1996）によると、自然の中での組織的な活動は、自然と調和して生きていくことの大切さを理解させるだけでなく、決まりや規律を守ること、協力することの大切さや自ら実践し想像する態度を学ぶなど、体験活動を通した総合的学習の機会を提供するものであり、青少年の育成にとって極めて有効だとされている。さらに、野外での教育的な体験活動に期待される効果として、８つのことが示されている。

表１　野外教育への期待

①	感性や知的好奇心を育む
②	自然の理解を深める
③	創造性や向上心、物を大切にする心を育てる
④	生きぬくための力を育てる
⑤	自主性や協調性、社会性を育てる
⑥	直接体験から学ぶ
⑦	自己を発見し、余暇の活動の楽しみ方を学ぶ
⑧	心身をリフレッシュし、健康・体力を維持増進する

このように、キャンプのような野外体験活動は、「生きる力」を育成するための、全人的な教育であると言うことができるだろう。

（3）冒険教育としての野外体験活動

キャンプの目的の一つとして、「冒険教育」がある。「冒険（アドベンチャー）」と聞くと、山や崖を登るような、命がけで何かをすることのように考えるかもしれないが、ここでは「挑戦すること」という意味で使われている。野外での活動は、予想もしていない出来事や非日常的な面があるため、冒険的な要素がたくさん含まれている。

この「アドベンチャー」は、人と人との信頼関係をつくるために効果的な要素である。人は、困難なことを共に乗り越えたときや、誰かに助けてもらったときに、相手を信頼するだろう。井村仁は「冒険教育は、自然環境の中で参加者にとって冒険的な行為を通して、参加者の自己の発達、人間関係の理解、環境の認識、野外活動技術の上達を図る教育活動」と解釈している。（日本野外教育研究会、1989、p.20）キャンプでは、雨が降って料理を作るための火がつかなかったり、風でテントが飛ばされたりすることがあるかもしれない。参加者は、その場の状況に合わせて行動し、工夫する力が求められているのである。

この冒険教育を効果的に行う手段として、「体験学習」がある。教育においては実際に怪我をするような危険のある活動をする必要はなく、その人にとって、その活動が「アドベンチャー」だと感じられれば良い。苦手な野菜を食べてみる、大勢の人の前で自分の意見を発表する、経験したことのない活動に参加するなど、人によっては大したことではないかもしれないが、その活動が、その人にとって意味のある挑戦であるかどうかが重要なのである。何かに挑戦して成功体験を積み上げることで、自信をもつことや親密な人間関係をつくることにつながると考えられる。

II．研究の目的

平成10年度に文部省は、小学校２・４・６年生及び中学校２年生を対象として、「子どもの体験活動等に関するアンケート調査」を行った。その結果から、子どもたちが「生活体験」、「お手伝い」、「自然体験」をしていることと、「道徳観・正義感」が身についていることとの関係を調べたところ、その間には次のような高い相関の傾向がみられるということが明らかとなった。

（１）生活体験が豊富な子どもほど、道徳観・正義感が充実
（２）お手伝いをする子どもほど、道徳観・正義感が充実
（３）自然体験が豊富な子どもほど、道徳観・正義感が充実

また、国立妙高青少年自然の家で行われた長期宿泊体験活動で、「生きる力」を測定する「IKR評定用紙（簡易版）」を行った結果、事前事後で比較すると、児童の「生きる力」は全体で向上しているという結果が出た。これは、統計的に見ても有意な差があった（$t = -2.979^{**}$（$p \leq 0.01$））。「生きる力」を構成する「心理的社会的能力」「徳育的能力」「身体的能力」の各３指標についても、すべての指標で向上しており、統計的に見ても有意な差がある。この結果、長期の宿泊体験活動が子どもたちの「生きる力」の向上に影響を与えたと考えられる。このように、自然体験や長期宿泊体験活動は、子どもの成長に必要であることがわかる。

しかし、実際に長期キャンプを行うには、必要な知識や技術を教えることができる指導員の確保が問題となる。教員を対象に長期自然体験活動の指導者講習会も多く行われているが、全ての教員が講習を受けているわけではない。また、学校の授業との調整も難しく、野外での活動になるので、健康や安全上の問題もある。したがって、必要な時間や指導員の確保が難しいため、長期キャンプを実施できていないところが多い。

では、長期キャンプでなければ教育的な効果を出すことはできないのだろうか。青少年野外活動研究会(伊藤忠記念財団、1988)が行った調査によると、少年自然の家の施設職員を対象に「あなたの施設が期待する宿泊研修の成果をあげるためには、宿泊数はどれくらい必要だと思いますか」という質問をしたところ、「２泊３日」49.2%、「３泊４日」38.1%、「４泊５日」6.8%という結果が出た。また、学校教員や少年団体指導者に「あなたの学校や少年団体のねらいが、期待通りの成果をあげるためには、宿泊数はどれぐらい必要だと思いますか」という質問をしたところ、「２泊３日ぐらい」が63.2%、「３泊４日ぐらい」が25.1%という結果が出た。野外活動は、単に集団宿泊活動で長い時間を過ごせば良いのではなく、そのねらいに応じた宿泊数を決め、プログラムを編成することが重要なのである。したがって、目的や条件がしっかりとおさえられていれば、短い期間でも効果を出すことはできるはずだ。

長期キャンプでは、１～２日目では仲間づくりが行われ、だんだんと班員のことが互いにわかってくる。３～５日目になると、相手の嫌なところも見えてきて、初めは我慢していたことも本音で言えるようになり、けんかが起こることもある。グループで問題を解決し、達成感を感じることで仲が深まる。そして、６～７日目ではキャンプが終わってから日常生活に戻る、班から個人へとつなぐ活動を行う。最初に出会ったときにと比べると、友達との関わり方や行動が違っているのが目に見えてわかることが多い。このように長期キャンプでは、変化がキャンプの活動のなかで見られるため、効果のあるものとされている。長期キャンプでは前半で心の葛藤があり、それが後半になって行動として表れているようだ。

この長期キャンプの前半で起きているような心の変化は、短期キャンプでも起きているのではないだろうか。短期キャンプの場合、長期キャンプに比べて時間が短いため、その変化を行動として見ることは難しいが、目に見えていなくても意識の面では変化があると考えられる。そして、キャンプに子どもを参加させる保護者は、子どもがキャンプを通して成長すること、変化することを望んでいるのではないだろうか。

また、子どもがキャンプに参加する理由としては、プログラムが楽しそう、新しい友達をつくりたいなどの積極的な理由だけでなく、友達に誘われたから、親が勝手に申し込んだからなどの消極的な理由も考えられる。どのような理由であったとしても、最終的に子どもをキャンプに参加させる決定権は、保護者にあると言うことができるだろう。そこで、本研究では、①保護者がどのような子ども観をもっているのか、②保護者は子どもをキャンプに参加させることにどのような期待をしているのかを調査することで、保護者の野外体験活動に対する意識を明らかにする。

Ⅲ．調査の方法と対象

山口県内の社会教育施設に協力して頂き、平成23年５月から８月に行われた、教育を目的とした組織的な短期キャンプ（２泊３日～３泊４日）に参加する子どもの保護者を対象に、現代の子どもに関することについて質問紙調査を実施した。集計後はSPSSを用いて、それぞれ統計的に分析を行った。なお、複数のキャンプに参加した者については、１回目に参加したキャンプで回収した調査票を使い、２回目以降については無効としている。

表2　調査事業の概要

	キャンプA	キャンプB	キャンプC	キャンプD
開催時期	5月	8月	8月	8月
開催期間	2泊3日	3泊4日	2泊3日	2泊3日
参加対象	小学1～6年生	小学1～6年生	小学3～5年生	小学4～6年生
参加人数	59人	60人	44人	183人
回収率	配布数 46 有効回答数 39 回収率 84%	配布数 40 有効回答数 36 回収率 90%	配布数 39 有効回答数 35 回収率 89%	配布数 183 有効回答数 116 回収率 63%

有効回答数　合計　226　（回収率　73%）

Ⅳ．分析および考察

（1）参加した家庭の特性

キャンプに参加した子どもの保護者を対象として、どのような目的で子どもをキャンプに参加させているのかを明らかにするため、「子どもに対するイメージ」と「キャンプで期待すること」について、質問紙調査を行った。回答者は、母親が211人、父親が13人、祖母が1人、合計226人であった。子どもの性別で見ると、男の子の保護者が118人、女の子の保護者が107人、性別無回答が5年生に1人である。

家族の人数は2～7人で、約半数が4人家族であった。核家族が188人、そのうち母子家庭が16人、父子家庭が2人である。また、祖父母と一緒に暮らしている家庭は、38人だった。きょうだいがいる人は183人、一人っ子は43人である。

表3　子どもの性別と学年別の人数

数値は人数、（　）内は%

	子どもの学年						合計
	1年生	2年生	3年生	4年生	5年生	6年生	
男の子	6 (54.5)	9 (56.3)	24 (66.7)	27 (40.9)	36 (57.1)	16 (48.5)	118 (52.4)
女の子	5 (45.5)	7 (43.8)	12 (33.3)	39 (59.1)	27 (42.9)	17 (51.5)	107 (47.6)
合　計	11(100.0)	16(100.0)	36(100.0)	66(100.0)	63(100.0)	33(100.0)	225(100.0)

＊兄弟で参加している家庭は、年上の子どもで加算している

（2）保護者の「子ども」に対するイメージ

参加者の保護者に対して「現代の一般的な小学生のイメージについての質問」を行い、31個の項目に回答してもらった。「当てはまる」、「少し当てはまる」、「わからない」、「あまり当てはまらない」、「当てはまらない」の5段階で回答してもらい、「当てはまる」と「少し当てはまる」を「当てはまる」、「あまり当てはまらない」と「当てはまらない」を「当てはまらない」とし、「わからない」を除いた割合が、表4に示してある。また、これらを「当てはまる」4点、「少し当てはまる」3点、「わからない」0点、「あまり当てはまらない」2点、「当てはまらない」1点、として得点化し、男女別に見たとき、平均点に有意な差があったものを表5に示した。

表4　一般的な小学生に対する保護者のイメージ

（%）

質問項目	当てはまる	当てはまらない
同学年の友達が多い	91.4	8.6
物事に飽きやすい	84.6	15.4
自己中心的	84.2	15.8
わがまま	83.8	16.2
パソコンやゲームばかりしている	81.3	18.8
甘えん坊	79.7	20.3
生き物を大切にしている	77.5	22.5
健康的である	75.8	24.2
知的好奇心が強い	74.7	25.3
自尊心をもっている	74.3	25.7
目標に向けて努力できる	73.3	26.7
思いやりのある行動をする	72.3	27.7
怒りやすい	71.2	28.8
食べ物の好き嫌いが多い	70.6	29.4
初めてのことにでも挑戦する	67.4	32.6
外で遊ぶことが少ない	66.4	33.6
感性が豊か	65.9	34.1
明るくあいさつする	65.3	34.7
悪いことを見て見ぬふりをする	65.2	34.8
マナーを守っている	64.0	36.0
向上心がある	63.0	37.0
手伝いをよくする	62.8	37.2
正義感が強い	61.3	38.7
積極的	61.0	39.0
他学年の友達が多い	55.6	44.4
責任感が強い	54.9	45.1
相手の話を最後まで聞く	50.5	49.5
他人に無関心	49.7	50.3
自分の考えを分かりやすく伝えられる	44.6	55.4
異性の友達が多い	43.3	56.7
旬の食べ物を知っている	34.3	65.7

まず、「同学年の友達が多い」という項目では、9割の人が「当てはまる」と回答している。しかし、他学年の友達については55.6%、異性の友達については43.3%である。これは子どもへの調査でも同様の結果であった。保護者から見ても現代の子どもは、異性の友達が少なく、他学年との交流も少ないことが考えられる。

次に、「パソコンやゲームばかりしている」が81.3%、「外で遊ぶことが少ない」が66.4%という結果から、子どもは家の中で遊んでいることが多いことがわかる。また、「パソコンやゲームばかりしている」というイメージは、男の子に対して比較的強いという結果が出た（表5、男の子3.97＞女の子3.71）。パソコンやゲームを使って一人で遊び、友達と遊ぶ時もゲームなどの機械を通して遊んでいると考えられるので、現代の小学生は、友達との直接的なふれあいが少ないのだと考えられる。

さらに、「相手の話を最後まで聞く」に「当てはまる」と回答した人は5割、「自分の考えをわかりやすく伝えられる」という項目では、「当てはまらない」と回答した人の方が多いという結果であった。直接的なふれあいが少ないことから、会話でのコミュニケーションが苦手というイメージがあるのだと考えられる。

また、80%以上が「当てはまる」と答えた項目をみると、「物事に飽きやすい」「自己中心的」「わがまま」「パソコンやゲームばかりしている」のように、マイナスのイメージのものが多い。国立青少年教育振興機構によると、現代っ子の特徴は、「家の中で体を動かさずに遊び、他人とあまり交流することなく、家庭内での関わりも少ない」と言われている。今回の調査から、保護者は子どもに対して、家の中で体を動かさずに遊び、自分勝手で、直接的な交流が少ないというイメージをもっていることがわかった。そして、「自分の考えをわかりやすく伝えられる」「積極的」「正義感が強い」「向上心がある」というイメージは、男の子よりも女の子の方が、平均点が高いという結果が出た。「思いやりのある行動をする」という項目は、女の子よりも男の子のほうが、平均点が高かった。

表5　子どものイメージ（男女別）

	平均点		有意確率
	男の子	女の子	
自分の考えをわかりやすく伝えられる	2.86	2.89	.030*
積極的	3.23	3.35	.017*
思いやりのある行動をする	3.53	3.38	.010*
正義感が強い	3.19	3.27	.008**
向上心がある	3.15	3.33	.022*
パソコンやゲームばかりしている	3.97	3.71	.000***
怒りやすい	3.38	3.47	.009**

*p<0.05、**p<0.01、***p<0.001

（3）保護者がキャンプに期待すること

キャンプに参加する子どもの保護者を対象に、「キャンプにおいて、子どもたちに どのような学びや経験を期待しますか」という質問をして、32個の項目に回答してもらった。各項目に対して、「そう思う」（5点）、「少しそう思う」（4点）、「どちらとも言えない」（3点）、「あまりそう思わない」（2点）、「そう思わない」（1点）の5段階で回答してもらい、結果を1～

5点で得点化した。平均点の高い順に並べたものが、表6に示している。また、男女別に平均点を見たとき、有意な差があった項目が表7である。

表6によると、どの項目に対しても高い平均点が出ているため、保護者は、具体的な考え方や能力を期待しているのではなく、キャンプに参加させることで、子どもに何らかの成長があるだろうという、漠然とした期待があることが窺える。特に平均点の高い項目は、標準偏差のバラつきが少ないため、学年や性別に関係なく期待されていることがわかる。この項目には、「ルールを守ること」「思いやり」「物を大切に使う」「食べ物の大切さ」というものがある。

まず、「ルールを守ること」「思いやり」については、集団生活を通して、特に身につけてほしいことだと考えられる。表4から、保護者は子どもに対して「自己中心的」「わがまま」というイメージが比較的強いことがわかった。自分のことだけを考えるのではなく、全体でのルールを守り、友達ことも考えられるようになってほしいと期待しているのだろう。また、「物を大切に使う」「食べ物の大切さ」を期待するのは、日常生活では物や食べ物に困るということが少ないからだと考えられる。キャンプでの少し不自由な生活や、自分たちで料理を作ることを通して、限りある物を大切に使い、食材に感謝する気持ちをもってほしいのだろう。

内閣府の行った「低年齢少年の生活と意識に関する調査」によると、小中学校の教育で重要と思うことは、「基礎学力をつけること」を挙げた者が最も高く、以下、「友達と仲良く過ごせること」、「考える力や創造力・表現力をつけること」、「礼儀・規律や心の持ち方を学ぶこと」、「音楽・芸術・スポーツや自然体験・社会体験など幅広く学ぶこと」などの順となっている。表6で上位にあった「ルールを守ること」「思いやり」「物を大切に使う」というのは、規律や心の持ち方である。学校では強く期待されていない分、キャンプで学ぶことを期待しているのだと考えられる。

さらに男女別にみると、男の子のほうが比較的に強く期待されている項目が多い（表7）。その理由として、2つの可能性が考えられる。まず、1つ目は、男の子よりも女の子の方が保護者の期待に対して、日常で応えていることである。表5の結果から、男の子よりも女の子の方が、平均点が高い項目が多いため、良いイメージをもっていることがわかる。男の子は、普段の生活で保護者の期待通りにならないことが多いため、いつもとは違う環境であるキャンプで成長することを強く期待するのだろう。

2つ目は、男の子に対しての期待の度合いが、女の子よりも高いことである。1972年に柏木が行った調査によると、「指導力がある」「理性的」などの「知性」、または、「活発な」「積極的」「意志堅固な」などの「行動力」が、男性に求められている役割の特徴である。一方、「従順な」「謙虚な」「かわいい」ということは、女性に求められている。近年はジェンダーフリーと言われているが、「男の子は男らしく、積極的でリーダーシップのある人間に育てるべき」といった考えのなかで育った保護者は、男の子に対しての期待が大きくなっているのかもしれない。

表6　キャンプに対する保護者の期待

質問項目	平均点	標準偏差
ルールを守ること	4.88	.330
思いやり	4.83	.420
物を大切に使う	4.82	.476
食べ物の大切さ	4.82	.440
達成感	4.82	.450
チャレンジ精神	4.79	.507
自分に自信を持つ	4.77	.536
協調性	4.76	.532
責任感	4.74	.504
自然に関心を持つ	4.74	.554
命の大切さ	4.74	.546
新しい友達をつくる	4.74	.631
お互いを尊重する	4.73	.542
相手の話を聞く力	4.73	.546
目標に向けて努力する	4.72	.594
自主性	4.71	.605
忍耐力	4.69	.653
積極的	4.69	.621
理解力	4.62	.638
知的好奇心	4.59	.662
創造性	4.58	.690
向上心	4.54	.743
社会性	4.52	.726
相手を信頼すること	4.52	.668
説明する力	4.51	.701
話をする力	4.49	.688
他人に関心を持つ	4.44	.776
基本的生活習慣	4.42	.841
自己を見つめなおす	4.39	.869
社会に関心を持つ	4.33	.783
正義感	4.29	.861
リーダーシップ	3.96	.942

表7　子どもへの期待（男女別）

質問項目	平均点		有意確率
	男の子	女の子	
忍耐力	4.77	4.62	.001**
命の大切さ	4.81	4.66	.000***
食べ物の大切さ	4.87	4.76	.000***
物を大切に使う	4.88	4.76	.000***
ルールを守ること	4.90	4.85	.030*
責任感	4.78	4.70	.029*
自然に関心を持つ	4.81	4.67	.000***
積極的	4.74	4.63	.006**
自主性	4.76	4.65	.005**
思いやり	4.87	4.79	.004**
リーダーシップ	4.02	3.93	.020*
チャレンジ精神	4.82	4.75	.018*
相手を信頼すること	4.47	4.59	.014*
相手の話を聞く力	4.81	4.64	.000***
説明する力	4.60	4.43	.004**

*p<0.05、**p<0.01、***p<0.001

（4）子どもをキャンプ参加させる理由

次に、子どもをキャンプに参加させた理由について、５つの項目に回答してもらった。

表8　子どもを参加させた理由

（複数回答）

参加理由	はい（%）	いいえ（%）
子どもに勧めて参加させた	57.1	42.9
子どもが参加したいと言ったから	61.5	38.5
前にも参加させたことがあるから	25.2	74.8
きょうだいが参加するから	8.0	92.0
知り合いが参加するから	13.7	86.3

「キャンプに参加することを子どもに勧めた」という保護者は57.1%である。また、「子ども自身が参加したいと言ったから」という質問では、61.5%が「はい」と回答している。

そこで、「前にも参加したことがある」を独立変数、「子どもに勧めた」を従属変数として、クロス分析を行った（表９）。さらに、「子どもに勧めた」「前にも参加したことがある」を独立変数、「子どもが参加したいと言った」を従属変数として、クロス分析を行った（表10、表11）。

今までキャンプに参加させたことがないから、子どもに勧めたという人が60.9%もいる（表9）。この結果から、キャンプに参加することは子どもにとって良いことだ、という考えをもっ

ている保護者が多いことがわかる。また、保護者が子どもに勧めていないが、子ども自身が参加したいと言ったという人が82.5%もいる（表10）。さらに、前にも参加したことあり、子ども自身が参加したいと言った人が80.7%という結果が出た（表11）。そして、前にも参加したことがある子どもの多くは、自分から参加したいと言っていることがわかる。したがって、今までに子どもをキャンプに参加させたことのある家庭では、子どもから自主的にキャンプに参加したいと言うことが多いため、保護者が参加を勧める必要がないのだと考えられる。

表9　「前にも参加したことがある」×「子どもに勧めた」

（%）

		子どもに勧めた		合計
		はい	いいえ	
前にも参加したことがある	はい	26（45.6）	31（54.4）	57（100.0）
	いいえ	103（60.9）	66（39.1）	169（100.0）
合　計		129（57.1）	97（42.9）	226（100.0）

$\chi^2=4.090$、df＝1、p＝0.043

表10　「子どもに勧めた」×「子どもが参加したいと言った」

（%）

		子どもが参加したいと言った		合計
		はい	いいえ	
子どもに勧めた	はい	59（45.7）	70（54.3）	129（100.0）
	いいえ	80（82.5）	17（17.5）	97（100.0）
合　計		139（61.5）	87（38.5）	226（100.0）

$\chi^2=31.562$、df＝1、p＝0.000

表11　「前にも参加したことがある」×「子どもが参加したいと言った」

（%）

		子どもが参加したいと言った		合計
		はい	いいえ	
前にも参加したことがある	はい	46（80.7）	11（19.3）	57（100.0）
	いいえ	93（55.0）	76（45.0）	169（100.0）
合　計		139（61.5）	87（38.5）	226（100.0）

$\chi^2=11.865$、df＝1、p＝0.001

次に、家庭でのキャンプ経験について、「家族でキャンプをしたことがあるか」「家族でキャンプをしたいか」という質問に回答してもらった（表12）。「家族でキャンプをしたいか」という質問では、約８割が「はい」と回答しているが、「家族でキャンプをしたことがある」と答えたのは３割だった。キャンプをしてみたいという気持ちがあるということは、子どもや家族にとって、キャンプは良い影響を与えるイメージがあるのだろう。

表12　家族でのキャンプ経験

質問項目	はい（%）	いいえ（%）
家族でキャンプをしたいか	81.9	18.1
家族でキャンプをしたことがあるか	30.1	69.9

しかし、実際にキャンプを行うとなると、必要な道具の準備や技術の習得など、時間も手間もかかると考えてしまい、断念してしまうのかもしれない。また、保護者の仕事だけでなく、子どもも学校や習いごとなどで日程を合わせるのが難しいために、実行できる家族は少ないのだろう。家族でキャンプをする機会が少ないため、施設で行われるキャンプでさまざまな体験をすることを期待し、参加させているのだと考えられる。

また、キャンプが良いものだという認識はあるが、その意義を理解していないために、家庭では行わずに外部団体に任せているということも考えられる。キャンプの意義には、社会教育、環境教育、生活体験などがあり、友達と協力することや活動に参加することに価値をおくこともある。しかし、キャンプで体験できることはそればかりではない。川で魚をつかまえたり、火をつけることに挑戦したり、星空を眺めたりなど、家族でも体験できることはたくさんある。大人が全部準備をしてあげて、子どもをお客さんのようにするのではなく、一緒にテントを立てたり、バーベキューの準備をしたりすれば、家族で協力して何かをやり遂げる体験もできるだろう。家族キャンプには同世代の友達とするときとは違った、家族ならではの体験ができると考えられる。

V．まとめ

まず、「保護者がキャンプに対して、子どものどのような成長を期待しているのか」であるが、保護者は具体的な考え方や能力など、明確な目的をもって子どもをキャンプに参加させているのではないことがわかった。現代の小学生のイメージについて調査したところ、80%以上の保護者が子どもに対して「物事に飽きやすい」「自己中心的」「わがまま」「パソコンやゲームばかりしている」というイメージをもっていることがわかった。現代の子どもは人との交流が少なく、自分勝手であると思っているのだろう。また、キャンプに期待することを調査した結果、すべての項目に対して高い期待があった。子どもをキャンプに参加させることによって何らかの成長があるだろうという、漠然とした期待をしているのだと考えられる。特に、「ルールを守ること」「思いやり」「物を大切に使う」「食べ物の大切さ」については、学年や性別に関係なく、強く期待されていることがわかった。少し不自由なキャンプでの生活を通して、物の大切さを学び、さらに、集団生活のなかで規律や思いやりの気持ちを学んでほしいのだと考えられる。

そして、子どもをキャンプに参加させているが、家族でキャンプをしたことがないという家庭が多かった。これは、キャンプが良いものだという認識はあるが、その意義を理解していない、保護者自身がキャンプのような野外活動を体験したことがないので、家庭ではキャンプを行わずに外部団体に任せているのだと考えられる。また、家族ではキャンプを行う時間がないので、子どもに体験させたいと思って参加させているということも考えられる。家族でキャンプをしたことがある家庭は約3割だったが、家族でキャンプをしたいと思っている人は8割もいた。つまり、家族でキャンプをしたいと思っているが、時間や経済的な理由から、キャンプを行うことは難しいと考えているのだ。文科省が出した「子どもの学校外での学習活動に関す

る実態調査報告」によると、平成19年度の調査では、小学生の８割以上が、学校外で習い事や学習塾に通っているという結果が出ている。保護者の仕事だけでなく、子どもも習い事などで忙しいため、ゆっくりとした時間をとることが難しいのかもしれない。したがって、家族でキャンプをすることは時間的にも難しく、実際に行う家庭は少ない。しかし、キャンプに子どもを参加させる保護者は、野外体験活動に対して前向きな評価をしている。

少年自然の家では、親子対象のキャンプも多く企画されており、日帰りの自然教室やカヌー体験なども行われている。また、最近では、登山用のファッションや便利グッズなどが注目され、キャンプや山登りなどの野外活動が大人のなかで流行となっている。これは、欧米のキャンプ活動の歴史とは反対に、日本では教育的な意味合いが強かった活動から、自然を楽しむレクリエーション的な活動へと発展しているのではないかと考えられる。保護者が野外体験活動の意義や良さを理解すれば、施設の主催事業に参加できなくても、家族で野外活動を楽しむことができ、子どもがどのようなことを体験しているのかを知ることができるだろう。

＜参考文献＞

林寿夫・川口博行・新井浅浩（1999）『アドベンチャー教育で特色ある学校づくり』学事出版、pp.33-37

伊藤忠記念財団（1988）「青少年の野外教育活動に関する研究 －『少年自然の家』における活動による実証的考察-」昭和62年度調査報告書、pp.94-95 , p.146

柏木恵子（1972）『青年期における性役割の認知』教育心理学研究20、pp.48-49

文部科学省（2008）「子どもの学校外での学習活動に関する実態調査」p. 8

内閣府政策統括官(共生社会政策担当)（2007）『低年齢少年の生活と意識に関する調査』

井村仁（1989）「キャンプと冒険教育」、日本野外教育研究会編（1989）『キャンプテキスト』杏林書院　1992年、pp. 8 -25

青少年の野外教育の振興に関する調査研究協力者会議（1996）『青少年の野外教育の充実について（報告）』

自然体験活動推進協議会（2006）「青少年の自然体験活動の充実に向けて～青少年の都市と農山漁村の交流活動推進に関する調査研究事業～報告書」平成17年度文部科学省委嘱事業、pp.24-29

田中治彦（1995）『ボーイスカウト』中公新書